

社会化の社会学

——個人と社会の接合形式——

教育社会学研究室 加藤 隆雄

Sociology of Socialization

Takao KATO

Socialization is the basic sociological problem in which the relationship between individuals and society is critical. Types of relationship are as follows; (a) articulatory homological relationship; (b) developmentally cumulative relationship. In this paper, I have cited that articulations are gone ahead of by practices. Practice is a form of social interaction, and not logically based. So language acquisition and role taking become possible because infants practice instead of internalization. In this way, social order is being re-formed.

目次

- 序 二つの社会化論
- I 論理タイプ
- II 接合図式
 - A 相互的關係
 - B 累進的關係
- III 実践的關係
- IV 結語

序 二つの社会化論

社会が秩序を保ちつつ成立しているのは何によってなのかということに関して、ジンメルとデュルケムが切り開いた視角は特筆すべきものであった。彼らの社会秩序の社会学は、かたやジンメルにおいては人々が相互作用によって結合し社会を形成する過程に注目し、相互作用様式自体に秩序があることを見いだした。他方、デュルケムにあっては、人々の精神の内奥に存する道徳が社会秩序を可能にしていた。デュルケムはこの道徳の内的構造の解明にその研究の多くを割いた。概念内容が異なるとはいえ、二つの理論が共に「社会化」の概念を保有しているということは社会秩序の社会学としては必然であるだろうが、それでもその差異は非常に示唆に富むものである。

ジンメルが用いた「社会化 (Vergesellschaftung)」は、その研究の中心的な観念を言い表すものであって、

社会として秩序化される以前の人々の集まり、いわば“前—社会体”が社会として自己塑成する過程のことである。

…社会化とは無数のさまざまな様式で実現される形式であり、この形式のなかで諸個人は、諸関心——感性的あるいは理想的、瞬間的または持続的、意識的あるいは無意識的、原因としてかりたてるものやまたは目的としてひきつけるような——を基礎として、ひとつの統一体に合成されるのであり、したがってこれらの関心もそのような形式のなかで実現されるのである¹⁾。

これに対してデュルケムにおける「社会化 (socialisation)」は、所属集団の観念・感情・習慣の体系を先行成員が社会の新参者の精神に内在させる過程のことである。「…社会的存在 (l'être individuel) を…個々人の内部に作り上げること、これこそが教育の窮極目標なのである。」²⁾ 社会化の社会学的研究はデュルケムが与えたこの方向を指向している。

デュルケムにとってこのような「方法的社会化」³⁾は、社会が持続するために必要なものだった。「…教育は、…社会が、固有の存在条件を不断に更新するための手段なのである。」⁴⁾ 教育による新成員の社会化によって、社会はいわば刻々と再形成されていくのである。

社会化概念に関するジンメルとデュルケムの差異について論じることはここでの課題ではない。本稿の趣旨にとって関連のある両者の差違は次の二点である。まず、

社会の（一次的）形成であるか、再形成であるか。第二に、社会の社会化であるか、個人の社会化であるか。

社会化論とは、社会秩序が個人を通していかに持続するかということを説明する理論であった。従って、個人—社会関係の本質の解明という課題を負っていたのである。社会化という問題は、個人内過程であるものがいかにして社会秩序の再形成でもありうるかを説明するべきものだったのである。ところが、現代の社会化論においては、一方で個人の社会化の発達論的研究がなされ⁵⁾、他方では個人が経過しているはずの過程として措定された研究がなされている⁶⁾。しかし、個人が社会化されることで社会といかに関係しているのかについては後に検討する二つの例外—パーソンズとバーガー&ルックマンの社会理論—を除いて重要な貢献はなかった。

現代の社会化研究はデュルケムの線に沿っているものの、個人の社会化に焦点を当て過ぎているがために、社会秩序の再形成という論点が薄まってしまった。それによって社会化論の重要なパースペクティブが欠落してしまった。と同時に、逆説的だが、個人の社会化の研究によって、社会秩序が個人からますます遠くにあるものとして映ってしまう。というのも、発達論的な個人の社会化研究にとって社会的諸条件は所与として扱われてしまい、一次的な関連は見失われるからである。

このような理論的状况で、個人内過程が社会過程に矛盾なく、つまり“ミクロ対マクロ”というア・ポリアを生み出すことなく連結することを約束するものだったはずの社会化の概念を問い直してみることは、このア・ポリアが社会学全体のものとなりつつある現在、必要であることは疑いを容れない。我々は第一に、社会秩序再形成過程としての社会化概念を持たなければならないし、第二に個人の社会化がそれとどのような関係があるのかを探らなければならない。個人内過程が社会過程でもあるような条件とは何なのか。本稿の目的は、個人内過程と社会過程との可能な接合型を検討することによって、個人社会未分化の状態である実践的過程を両者の媒介過程として特定し、この問題に対する重要な視角を開拓することにある。このためにまず個人過程と社会過程の無用な混乱を取り除いておくことが肝要である。

I 論理タイプ

社会化論を根底的なところから再検討するにあたってまず最初に念頭におくべきことは、個人と社会は概念の論理タイプ⁷⁾が異なっているということである。個人aと個人bは比較可能だし、aがbに対してcを与えたと

いうことは言うまでもなく可能である。他方、社会Aと社会Bも（比較のために若干の調整は必要かも知れないが）比較可能であるし、AとBが交戦状態にあるということも可能である。しかし、個人aと社会が交戦状態とはどのようなことだろうか。また、次のような文章を考えてみよう。

幼児が大人になる。

または、

課長のaさんが部長になる。

これらの表現に奇妙な点はない。ところが、

個人bが社会的になる。

という方では、個人bに社会性とよばれる特性が内属した事態が表現されている。しかし、当然ながらbは彼自身で社会であるわけではない。従って極論すれば、bがそしてすべての個人が社会的になっても社会は成立しないかもしれない。なぜなら、個人が「社会的」になることが社会が成立することの必要十分条件であることの保証はどこにも明示されていないからだ。

具体的実在と抽象概念との、或いは集合の元と集合自身とを混同することからは比喩以上のものを期待することはできない。幼児が社会化される際に生起している事態は、またどのような二次的社会化においても社会化される者が経験するのは、社会がいかなるものと定義されようと、社会それ自体の成立ではない。しかし、社会化研究は素朴にこの事態を看過してきた。すべての、あるいは大部分の個人が社会的になることが社会の持続にとって十分条件とされてきたのである。我々はここに暗黙の前提を見ることができよう。個人が社会性を身につけるならば、社会秩序は維持される、というわけである。ところが、前述したように、個人が社会性を身につけることがどうして社会秩序の維持に帰結するのかが明らかではない。意図されざる結果 (unintended consequences)⁸⁾とは社会学的によく知られたメカニズムであるが、個々人の社会性は集会的には社会秩序を形成しないかも知れないのである。

従って、社会秩序の維持と個人の社会化の関係を探ろうとするならば、個人の社会化が社会秩序の維持にどのように寄与するのかを特定しなければならない。しかし、両者はいわば集合の元と集合自身との関係である。それ故、社会の特性、即ち社会的諸制度、シンボルや価値の体系が個人という概念範疇の持つ特性へといかに翻訳されるか、また、個人過程が社会過程としていかに翻訳されるかを定式化する必要があるのだ。社会化、つまり個人と社会の接合の問題は、相互翻訳の問題である。これが社会化論の探求すべき領域にはかならない。

このような領域規定にあたって、本稿は特に一次的社会化に主要な関心を払う。幼児期において個人—社会関係は《露出》していると考えられる。つまり、社会と個人が接合する最初の形態がそこにおいて観察できると思われるのである⁹⁾。ひとたびこの接合方式が確立されてしまえば、あとは自動的な馴化がなされると考えることは自然なことである。幼児期の一次的社会化は個人社会未分化の状態を最もよく示してくれるものなのだ。

II 接合図式

個人と社会が接合する型というのは、社会学にある程度のコンセンサスが得られる人間観を採択するならば、即ち、人間とは無限の自由の主体であるとか、DNAの操り人形にすぎない¹⁰⁾といった人間観を斥けておかなければ、個人と社会の論理タイプのカテゴリーミステイクに陥らない個人—社会接合の型として次の二つが可能である。

- (a) 相同的關係…個人の指向の分節体系が社会の分節体系と同じである。
- (b) 累進的關係…諸個人の活動が蓄積・沈澱して制度化され、社会レベルを構成する。

これらは、個人—社会関係の二つの可能な型であるがゆえに、両者の接合形態である社会化を説明する二つの原理でもあるはずである。

このような個人—社会の接合図式は、現代社会学の二つの主要な社会理論であるパーソンズの『社会体系論』とバーガー&ルックマンの『現実の社会的構成』に見いだすことができる。我々はこれらの二つの原理を批判的に検討し、社会再形成の理論の構築の端緒としよう。

A 相同的關係

社会が再形成されるためには、その成員である個人の内部に社会構成原理が存在していればよい、というのが社会化論にとってデュルケム以来基本的な教説であった。しかし、これだけでは個人が社会的になればよいと考えることと違いはない。社会をデュルケムのように精神的なものとして考えることを回避しようとするれば、これがカテゴリーミステイク¹¹⁾とはならないような個人—社会関係を想定しなければならない。

個人がもつ様々な観念や行動体系が社会を構成している観念・行動体系と一致するならば、個人が表象したり行為したりする“レパートリー”は社会のものと必然的に一致する。個人が表象したり、行為したりすることがそのまま社会を再形成することになる。なぜなら、個人

は社会のレパートリー以外のものを知らないからである。これを最もよく示しているのが言語の例である。社会的表象体系としての言語は、個人によって使用されることで再形成される。個人は、その言語体系以外のものを知らないの、使用すること自体が再形成過程となっているのである。

このように、個人が習得している行動を起こす際の在り方自体が社会を構成する原理と一致しているが故に、必然的に社会が維持されるという考え方は、パーソンズの社会システム論も、バーガー&ルックマンの現実構成主義 (reality constructionism) も採用している。我々は、個人の“内部”と社会構成原理とが相同的であるという意味で、このような概念図式によって説明された個人—社会接合の型を個人—社会の《相同的關係》¹²⁾とよぶことにしよう。

パーソンズにおいて社会的な原理は特に価値として考えられている。

〔学習過程の〕社会化効果とは、共通価値が自我のパーソナリティのなかに内面化され、自我と他我のそれぞれの行動が相補的な役割期待—サンクション体系を構成するにいたるように、他我の役割にたいして相補的な役割のなかに自我が統合されることと考えられる¹³⁾。

価値の内面化 (internalization) が社会的役割を形成し、それによって役割体系としての社会体系は維持されることになる。社会体系と相同的な価値指向パターンは役割相互行為の中で他我への同一化によって内面化される¹⁴⁾。価値は、いわば社会の運営の調整子として作動している。

一方、バーガー&ルックマンの社会化論は、他者への同一化によって獲得された主観的なアイデンティティは、その反面としてその個人の社会的な位置づけを含んでいるという点でパーソンズと軌を一にしている¹⁵⁾。ただし、パーソンズの内面化の考察が多くを行動心理学及びフロイト心理学に依拠しているのに対して、バーガー&ルックマンはG. H. ミードの理論を用いて説明している。しかしまた、パーソンズに比べれば、内面化の過程の論究ははるかに簡単に済ませられているのは否めないのだが。

幼児の一次的社会化において、他我によって内面化された規範は、具体的な個人ではなく、人称一般にまで拡大される。これが“一般化された他者 (generalized others)”である。

意識のなかに一般化された他者が結晶化されたとき、客観的現実と主観的現実との間には調和的な

関係が確立される。〈外界〉で現実的なものが〈内界〉で現実的なものと一致するわけである。客観的現実が容易に主観的現実へ〈翻訳〉できるようになり、逆もまた可能になる¹⁶⁾。

いわゆる「個人の内在社会」とは、内面化された価値や規範に基づいて個人が行動するという事態である。この状態をより一般化して述べるならば、個人の諸分節が社会構成体の諸分節と相同であるということである。

人間は世界を知覚し行為する際に意味あるまとまりごとと弁別している。このような弁別作用によって分割された単位が分節である¹⁷⁾。価値あるいは規範とは、このような分節の一形態として考えられる。

相同的分節とは、個人の諸行為が表現される“枠”である。従って、実現された諸行為は社会構成体にとって適的なものとなる。それ故、相同的関係には「社会性」の習得という前提がそうだったように予定調和的だとの誇りは当たらない。

個人—社会関係が相同的関係に基づいていると考えることは、しかし次に指摘するような問題点を孕んでいる。

第一は、内面化の概念に関してである。価値や規範、あるいは分節が内面化されるというのは、どのような事態であるのか？ それは原理的に突き詰めていけば、行動心理学の「条件付け」や大脳生理学のニューロン結合によって表現される事態かも知れない。しかし、そのように表現することが可能かも知れないにしても、社会学的説明の中にそのような説明方式を持ち込むことは、例えば、「鉛筆」とは何かと問われて「ペンシル」という答えをするのに似ている。一つの体系に別の体系を持ち込むことには、慎重であるべきだし、両者が矛盾なくつながるのか、一方の体系の用語で他方がすべて説明し尽くされてしまっても異議はないのか（生化学が原子物理学で説明されるように、社会学も応用生物学または応用生理学なのだろうか？）、といった点を検討しなければならないのである。それゆえ、内面化の概念を心理学・生理学の用語に置き換えることなく説明することが必要となるのであるが、けれども社会学において内面とはいかなるものなのかは明らかではないのである。

内面化に関する第二の問題は、何故幼児は内面化を行なうのかということである。もしも、純粋に条件づけられた報酬—処罰のメカニズムに基づいているならば、模倣が起こるのはどうしてなのか？ 幼児の遊びの活動は、他者のサンクションによっては説明できないのである。模倣や「ごっこ」、遊び活動は何ら功利的な要求（それをしないと罰を受けたり、肉体的苦痛が生じるといった）に基づくものでない以上¹⁸⁾、パーソンズが用意した概念

装置では十分ではない。確かにパーソンズは、模倣を学習の内面化過程から区別し、独立したメカニズムとして扱っているが¹⁹⁾、模倣は学習から切り離して考えられるものなのだろうか？

この問題は、幼児にとって内面化は最初から受け入れ可能であるのかという第三の問題と関わっている。幼児にとって最初の内面化とは何だったのか？ それを可能にした基盤そのものはどのようにして可能になったのか。常識は、漸進性の観念によってこの問題を暁してきた。

「幼児は最初は何が何だか分からないが、次第にいろいろと覚えてくるものだ」というように。あるいは、生物学的生得機構の問題に還元してきた。「幼児には社会関係の中で機能するような装置が内在している」というように（「木は何故燃えるのか？」「火素（フログストーン）が存在するからだ」とパラレルである）。しかし、例えばこれが単語や発話の意味ということになれば別である。彼はいかにして「理解」を行なったのか？ 明らかに文化的に相対的な存在である言語が生得的装置によって理解されるというのは、ナンセンスである。彼はまず最初に語 α を理解しなければならない。しかもその時、我々が外国語を習得するときのように類推の手引きとなるような知識は幼児にはまだ存在していない。「—そこで、われわれはそれらをまさに説明しなくてはならない。—しかもほかの語を使って！ すると、このような連鎖の最後にくる説明はどうなるのか。」²⁰⁾ 基底単語 α の意味はどのようにして知られるのか、このことはむしろ論理的な問題である。

第四の問題は、内面化されたものはどのようにして保管されているのか、というものである。我々は相同的関係の内面的体制化は一度成立すると恒久的に存続すると考える必要はないにしても、その変化の影響を勘案しなければならない。幼児が成人へと発達するにつれて、相同関係はより精緻なものになるであろう。しかし、幼児と違って成人は「本音」と「建前」の使い分けを知っているので、価値や規範は“破格”に用いられる。つまり、価値に使い分けが存在する。とすれば、社会の諸分節もそのような「破格性」を持つものなのだろうか？ 複数の社会規範に関係した場合、複数の相同的関係が生じることになるが、これらが通常混じり合わずに、いわば別次元に存在しているように思われるのはいかなる事情によるものなのだろうか？

以上の検討によって、内面の概念が幾つかの不都合を招くことが明らかになった。これらの論点は、次のような観点に基づくものである。社会と個人の相同的関係とは、個人の内面が社会の分節と相同的に分節化されてい

るのではなく、個人の社会的所作が社会と相同的な分節という事後的な外見をとりつつ遂行されているということなのではないだろうか。内面的な分節は上記のような困難をもたらすのである。個人の内面の分節とは、外的な行為の内面への投影ではないのか。実際、相同的分節は常に実施された形で、事後的にしか現われてこない。彼が行なった行為が規範適合的だから、彼の内面は社会規範と相同的に分節されているに違いない、というように考えるのである。それは常に現象として経験的に知られるだけなのだ。このことを次の累進的関係の考察においてより明確にしよう。

B 累進的關係

アダムとイブやロビンソン・クルーソーに遡る必要はないにしても、諸個人が社会を形成していく過程はどのような社会にとっても存在したはずである。ニュートンの『プリンキピア』やマルクス＝エンゲルスの『共産党宣言』などのように世界史レベルで変化をもたらしたのもあれば、匿名の個人の機知や工夫が共同体において制度化されていく過程というのもやはり存在するのである。我々は、個人が社会的分節を受動的に内面化する過程だけではなく、個人が社会に創造的に（勿論、破壊的なものも含んでの話だが）寄与していく関係もまた考慮しなければならない。これが個人—社会接合の第二の型として考える《累進的關係》である。

これを「累進的」と表現するのは、バーガー&ルックマンの社会形成の理論に基づいているからである。バーガー&ルックマンは客観的現実としての社会を捉える際に、次のような定式化を行なう²¹⁾。

人間の身体的活動・労働によって様々なものが産出される。道具の創案、農業労働、賃金労働、あるいは言語や図像による創造物…。これらを産出する活動が“外化(externalization)”である。これらは習慣化されるが、この時共同体のメンバーが相互にこの習慣を典型的なものとなすようになる。というのも、ある状況に対して無限の対応が可能であっても、その選択肢が狭められていた方が省力化につながるからである。ここにおいて人間の外化活動は“客観化(objectivation)”されたといい、これが制度化の始まりである。外化された活動は作り出した主体である人間にとっては自明のものとなってしまうのであり、即ち“沈澱化(sedimentation)”が起こっているのである。これに対して“対象化(objectification)”によって行為主体はまた新たな外化活動を加えていく。このようにして人間の外化活動を社会的現実へと次元を高める作業が螺旋的に進行しているの

あり、このような個人—社会関係を累進的關係と定義することにするのである。

累進性は社会化の過程としては考えることができないであろう。しかし、冒頭に述べたように社会化が漸進的社会再形成でもあるとするならば、この第二の個人—社会関係が重要であることは理解できよう。なぜなら、新たに個人が社会化することは新たな対象化活動の導入であるからだ。我々は社会化概念にこのような側面を振り込みたいと考えるが、しかし、そのためにはバーガー&ルックマンの現実構成主義理論の問題点を抽出しておく必要がある。

バーガー&ルックマンの累進的社会構成の理論は、個人—社会の二元論を時間的様態において解決したものと見える。個人の活動は時間経過の中で、制度化し、沈澱化して社会的客観的現実となる。

しかし、第一に、外化され制度化されるものが「個人の」活動であるというのはどのような意味においてであるのか。個人の意思に基づいているとは言えないようなときがしばしばある。例えば、特定の間人関係に入ると快活に振舞おうとしてもどうしてもできないといった場合。彼の意思に彼の行為は背いているわけである。このことが示唆するのは、個人の行為ですら個人自身に純粹には還元できないということである。勿論、バーガー&ルックマンは社会から完全に独立した個人を考えているわけではない。しかし、社会と個人(アイデンティティ)の弁証法というときに、一方の項として個人を設定することにどのような意味があるのだろうか。

とはいうものの、バーガー&ルックマンは個人に属していない非人称的な領域を考えていなかったわけではない。それは沈澱化という概念で示されるもの、である。

幾人かの人間が同じような経歴を共有する場合には、間主観的な沈澱化が起こり、そうした経歴の経験は共通の知識在庫のなかに統合されるようになる。間主観的な沈澱化は、それがあんならかの形の記号体系に対象化されるようになったとき、つまり共有された経験を反復して客観化できるという可能性が生じたときにのみ、はじめて真の意味で社会的であるということが出来る²²⁾。

彼らの考えでは、この沈澱化とは知識が記号、特に言語として結実して伝承される過程である。「ことばは共有された経験を対象化し、それらを言語共同体に属するすべての人びとの手もとに供することによって、集団的な知識在庫の基礎となると同時に、その道具にもなる。」しかし、例えば、“身体技法”²³⁾の蓄積と伝達は言語によるのだろうか。あるいは、公共的な振舞いはしつけという

形で正されるにしても、なおかつ我々が半意識的にしか知らないものがある²⁴⁾というのはどうしたことだろうか。また前述したことだが、幼児が覚える最初の言語というパラドックスはこのような知識の沈澱化の説明でいかにして解釈しうるのだろうか。

以上のことを踏まえて、個人—社会関係をいかなるものとして考えたらいかを考察し、そこにおける社会化とはいかなる事態であるかを吟味することにしたい。

III 実践的關係

個人と社会の相同的關係が、個人の内面に価値指向パターンや一般化された他者として存在すると考えることは、個人の内面を前提とするために、先に批判した内面概念の不備を免れることはできない。さらに、我々は累進的關係の検討により、個人の活動といえども個人に属するものではないことに注意を促し、また沈澱化が言語以外の経路を持っていることを示唆した。ここでみるのは、相同的關係と累進的關係という区分が外的なものであって、両者に内的連関性が存在する、つまり両者を媒介するような関係を設定できるということである。

相同的關係は遂行されて初めて社会次元を構成する。個人の単純総和に社会が還元できないにしても、個人が相同的分節を行使することが社会を構成するという事は明らかである。我々は「行為」と区別して、このような相同的分節の行使という意味で《実践》という語を用いる。

個人内部にあると考えられる諸分野が発動される場合は、相互作用場面及び個人的内言・想像である。相互作用において彼は、特定の役割関係におかれ、また言語を代表するシンボル体系により相互作用を行なう(個人的な場面では役割は意味を持たないが、シンボル体系は用いられる)。分節の発動は役割行為・発話行為とシンボルを用いた思考においてなされる。従って、我々は役割及びシンボル、特に言語の使用とについて考察しよう。個人がこのような分節に従って実践を行なう場合、彼は当該の《知識》を使用していると言うことにしよう。

相同的分節を行使する者は、彼がその時々におかれている社会関係から独立しているわけではない。成人でさえも特定の役割関係において別の役割関係における役割知識=分節を持ち出すことはほとんどない。このような事態は、「役割緊張」解決の手段の一つとしてグードによって定式化されている「役割個別化(role compartmentalization)」であるが²⁵⁾、これは戦略的に用いられるというよりも、既に組み込まれているのである。役割当事

者(role incumbents)にとって、その時々包絡されている社会関係が既にそのような使い分けを可能にしているのである。従って、そこに使い分けを操作しようとする“意志”は通常介在していない。ゴッフマンの誤読は逆の結論をもたらすだろうが(「詐欺師の社会学」)、ゴッフマンにとってそれが意識の水面下にあることが重要だったのであるし、同様に我々もそのような考えを支持している。

幼児においてはより事は簡単であるが、より重要である。新生児のおかれている社会関係とは最初のものである以上に一義的なものである。彼の包絡されている社会関係は、新生児—養育者以外のものではない。彼の所作(act)は対者にとって役割として解釈され期待されている。

…社会化の担い手だけでなく、社会化されるものもまた、役割行為をおこなっていると考えなければならぬ。おそらく誕生した瞬間には、幼児はそうしてはいない。しかしほとんどすぐさま、ある役割がかれに帰属される。この役割は、かれの行動についての期待を含んでいるのである。幼児にたいする成人の行動のいかんは純粋に物的な客体にたいする成人の行動と同一ではなく、かれの出方次第となり、またたく間にかれの期待であると解釈されるものに依存することになる²⁶⁾。

彼の所作がその都度役割を形成しているのであって、彼にとって役割の操作は不可能である。役割は最初に実践され、次に意識され定義される。このことは、役割知識が知られることなしに実践されるということである。同様に、バーガー&ルックマンも、

…自我とは写しとられた存在であり、意味ある他者が最初にそれに対してとった態度を反映する、ということ、つまり人間は彼にとっての意味ある他者から呼びかけられた当の存在になる、ということだ²⁷⁾。

と述べるのである。

幼児の所作は解釈された役割になるわけであるが、彼は意識的にそのように振舞ったのではない。しかしながら、役割を演ずることはできるのである。従って、彼はいわば《実践的に知っている》。このような役割知識の原初的構造は、すべての役割行為の基盤である。この意味で、幼児による模倣=他者の役割演技は、明らかに物まねとは異なる。そこには意識的動作、まねようとする意識が存在していない。母親の模倣をする女兒は「母親になりきる」のであって、ふりをすること何ら目的性(他人に面白がられるとか、嘘をつくとか)が見いだせ

なくても構わないのである。彼女にとっては役割の知識は、意識されないままである。というのも、彼女の模倣経路は身体的なものであり、価値や規範として内面化されているものではないからである²⁸⁾。

同様に、言語習得について考えてみよう。幼児は語の意味をどのようにして知るのか？ 先に基底単語 α について述べた。しかし、これにはまだ反論の余地がある。幼児は語を事物を指し示すものとして理解するという考えがそれである（「語の直示的教示」²⁹⁾）。ここでは、教示された語「わんわん」が縫いぐるみの犬の部分の指すのか全体を指すのかとか、四本足で毛の生えた生物なのか「はりぼて」なのかといった疑問点は触れる必要がない。何故なら、より基本的な問題を抉出できるからだ。ヴィトゲンシュタインは、語を事物によって直接指し示す規則と「赤」という語と実際の赤色とを見較べる規則、あるいは一、二、三、という風に数える時に用いられる規則とではそれぞれが全く異なっていることを指摘する³⁰⁾。ここから彼の有名な言語観が定式化される。「語の意味とは、言語内におけるその慣用である。」³¹⁾

それぞれの語によって規則が全く異なることは、語の意味の習得過程が我々が考えている以上に幼児の“内面”からはみ出したものであることを示唆する。幼児は、数えるという実践の際は勿論のこと、「語の直示的教示」においてさえ「指し示す」という実践に関わらなければならない。そうしないと彼は発せられた音が一体どのような事態であるのか、それが何かを「指し示す」ものであって、外界の様々な雑音の一つではないということに気付くことはない（もっとも「気付く」とは形式的な表現であって、「指し示す」実践に関与することが「気付く」ことの内容なのだ）。言語の意味とは定められた実践に携わることであるから、幼児の言語習得は慣用＝実践の熟練にほかならない。そして、そのような社会関係における実践形態とは、幼児の場合、養育者との相互作用の形式なのだ。

このように考えると、パーソンズやバーガー&ルックマンの考えるようには言語の分節と個人の内面の分節との相関は一次的なものではなく、むしろ一種の擬似相関である。幼児の言語使用は、それが実践的であるがゆえに、役割行為と同様、内面的意識を媒介とせずに遂行しうる。個人が「役割の束」³²⁾「役割の掛け釘」³³⁾であり、語が「慣用の束」であるのは、個人の内面でそれらに一貫性が与えられているというよりも、場面毎で変化する対処法の寄せ集めであるという事情によるものなのである。

ここからもわかるとおり、行為の分節である役割にし

ても、表象の分節である言語にしても、相関的諸分野は実践されるものである。実際、「身についた」という表現が示すように、覚えただけの知識は実践によって初めて彼に属するものと考えられるのである。習得された知識は、社会的・想像的に実践されなければならない。知識が習得されたとは、知識が実際に行使されること、実践されることを指している。例えば、ある機械について仕様書に目を通しただけでは、彼の知識は不十分なままである。彼はその機器の様々な部分を触り、スイッチをひねり、レバーを上げ下げしてみることが必要であり、また実際に触らなくても“頭の中で”そのような操作を試みるのである。あるいは、数学の公式のことを考えてみればいい。 $a^2 - b^2 = (a + b)(a - b)$ という公式は、実際には 99×101 を解く際に用いることができなければ、習得したとはいわれないだろう。同様に、社会的役割においては、彼の演じる役割がどのようなものかについての知識は、その場で演じることによって形を採る。あるいは、そのような社会関係を思い描くこと、想像的に演技を試みることで現実化するものである。

言語的にせよ役割のものにせよ、知識は、このように実践という形でなければ我々にとって接近可能ではない。というのも、脳の貯蔵庫というのは物品の倉庫のように立ち入り可能ではないし、たとえ入ることができても、そこには意味不明な神経細胞の組織しか存在せず、倉庫のように物品を調べたりできないのだから。

分節＝知識が実践性を持つこと、即ち実践によってのみ実現することが示されたのであるから、これらの分節がそのような実践を可能にする相互作用の中に含まれていると考えることができる。一次的社会化において、分節は《その場しのぎの》性格しか持っていない。幼児が特定の規範を内面化したように見えるのは、彼が相互作用をしているからである。いわば、相互作用に没頭していること自体が分節性を帯びている。このような分節を《実践的知識》と呼ぶことにしたい。これによって、幼児の初期的社会化のパラドキシカルな問題、即ち最初に内面化された α が説明されると考える。幼児には生物学的所与として知覚機構が備わっているが、これだけでは社会化には程遠い。母親からの働きかけに対してどのようにいい加減にであれ、所作を行なうことが既に実践的知識の始まりなのである。何故なら、彼の養育者にとってはそれが役割として解釈されているのだから。従って、 α は内面化されたのではない。実践されたのである。幼児にとって最初に“習得”した語は彼の環境の要約であるといわれる。このことは所作についても同様であって、彼が最初に“習得”した有意味な身振りは、そのと

き置かれている社会関係にはめ込まれたもの、即ちその場しのぎのものである。

しかし、《その場しのぎ》では幼児の社会化は起きるはずがないのではないか？ 通常我々は幼児の“習得”の成功に較べ、失敗にほとんど注意を払わない（「幼児なのだから失敗して当然だ」）。従って、その場しのぎのもの、不確実性は幼児の未熟さのためとされている。実際は、幼児が未成熟だということは身体発達のなものであるのではなく、実践の《その場しのぎ》の性格によるのである。このようにして、基底単語（所作） α が実践されるのであるから、続く β , γ , δ , …はそのうえに積み上げられるのである。

このことは翻って、成人の《その場しのぎ》実践が安定しているのはなぜかという疑問を引き起こす。成人の知識についてはここでは深い解明を果たしえないが、それは幼児よりもはるかに知識の利用可能性³⁴⁾が増加していることにより一応の説明がつく。このことは同時に、知識の利用可能性が安定した社会関係と併進関係にあるということの裏付けでもある。幼児にとって、安定した社会関係は“重要な他者”（意味ある他者：significant others）という概念で定式化されてきた³⁵⁾。あるいは幼児の「人見知り」とは、分離不安によって説明されるものではなく、コミュニケーション関係の齟齬によるものだというパワーの説とも一致するものである³⁶⁾。

実践が個人に還元できないとは、実践の端緒が既に他者へのその場しのぎの反応であったことに由来する。つまり原初実践は相互作用関係の実現態なのである。そして、合理的な理由付けよりもはるかに古いものであるため、何故特定の関係で特定の実践が喚起・発動されるかについて、個人内での合理化がなされていない部分がほとんどである。

実践の意識的諸部分に対する先行は、例えば“メタコメント”という発話に見出される。内田は、幼児の「可逆的操作」の発達を物語産出の場面において検証しようとして、次のような実験を行なった³⁷⁾。4～5歳児にA・B二枚の絵を見せるが、Aの絵には結果（花が咲いた・太郎君がころんだ）が描いてあり、Bの絵には原因（花に水をやった・太郎君が石につまづいた）が描いてある。子供はこれらをA→Bという呈示順に、即ち結果から原因へと表現するように求められる。従って、彼は「(A)花が咲いたのは、(B)花に水をやったからです」という“逆順方略”をもって答えなければならない。しかし、彼は“事象順方略”をもって「(B)花に水をやったので、(A)花が咲いた」と答えてしまう。ところが、実験者がAから話すように求めると、「できないよ。[物事の] 順番

が決まってんだから。」と答えるのである。彼はここで結果を先に述べ（「できないよ」）原因を後で説明する（「順番が決まってんだから」）という逆順方式の発話を行なっているのである（メタコメント）。実験的状況が要求する心理学的意識概念を、実践的知識は皮肉をもってかわしているかのようなのである。彼は自分で知る前に実践しているのである。

個人の社会化は意識で統御されない部分、若干不正確な表現ではあるが、「前意識的」部分が個人内に形成されることも含んでいる。と同時に、社会がこのような前意識的プロセスによって維持されているということもまた明らかになってきている³⁸⁾。（実際、制度や社会構造とは主観的に意識されているものではないし、また物質的な存在でもない以上、前意識的知識に属するものとして表象されることは不自然ではない。）社会の再形成過程はこの低層部分で蠢いていることになる。ここに働く原理とは、もはや個人と社会の相同的関係や累進的關係として考えることのできるものではない。個人は社会の分節と相同的分節を内面化しているように観察されるが、それは実践が内面に投影された影である。そのような分節の形成の始まりとは質的変化でなければならず、発達で考えられるような螺旋的なイメージでは困難である。幼児にとって自然なものがいかに社会的でもあり得るかを考えるならば、実践的關係に辿り着かざるを得ない。彼がそれについて意識しないような知識が存在しているが、それは実践されることで存在している、むしろ実践そのものなのであり、事実上社会過程そのものなのである。

IV 結語

相同的関係とは、上に述べたような知識と社会過程との関係を内面という概念装置を通して理念化したものである。一方、累進的關係は、実践が社会を形作るという理念化を行なうものだったが、未だ個人—社会という二分法を内包していた。我々は実践という概念により、個人と社会が癒合した部分を明るみに出す端緒を作ることができたものと思う。

ここで素描したような社会化論は、まだ充分なものではないし多くの精緻化を経なければならないだろう。前提問題として残しているのは、「社会」の概念規定であるここでは、制度とシンボル及び価値規範の体系として考えたが、これと相容れないような社会観は多くある。さらに今後の大きな問題となるのは、第一に社会化の諸段階の特定化、第二に社会変動の問題、第三に言語的知識の問題である。新生児期のような特定化されたコミュニ

ケーション・ネットワークから世界が広がるのが、社会再形成をどのように左右していくか、またそのことが社会変動にどのように関わっているかを究明する道筋を明確にしなければならない。そのための重要な概念装置は、実践及び知識であるが、想像的なものを可能にするという点で言語的知識は重要であると考えられるのである。

注

- 1) ジンメル, G. 「社会学の問題」 居安訳『社会分化論 社会学』青木書店, 1970, p. 182.
- 2) デュルケム, E., 麻生・山村訳『道徳教育論1』明治図書, 1964, p. 22.
- 3) デュルケム, E., 佐々木訳『教育と社会学』誠信書房, 1976, p. 59.
- 4) デュルケム, 前掲書(1964), p. 22.
- 5) 特に次のものに代表される。
Child, I. L., "Socialization", in Lindzey, G. (ed.), *The Handbook of Social Psychology*, 1954.
Ziegler, E. and I. L. Child, "Socialization" in Lindzey, G. (ed.) *The Handbook of Social Psychology*, 2nd ed., 1968.
日本の文献では、斎藤耕二・菊池章夫編著『ハンドブック 社会化の心理学』川島書店, 1974.
- 6) 代表的なものとして, Bronfenbrenner, U., "Socialization and social class through time and space", in Maccoby, E. E., Newcomb, T. M. & Hartley, F. L. (eds.), *Readings in Social Psychology*, 1958. 及び Kerckhoff, A. C. (ed.) *Research in Sociology of Education and Socialization*, vol. 1-4.
- 7) ラッセル, B., 平野訳『数理哲学序説』岩波文庫, 1954.
- 8) マートン, R. K., 森他訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961.
- 9) 同様の見解が, パーソンズにもバーガー & ルックマンにも見られる。
- 10) ドーキンス, R., 日高他訳『生物=生存機械論』紀伊国屋書店, 1980.
- 11) Ryle, G., *The Concept of Mind*, 1949.
- 12) パーソンズ, T., 佐藤訳『社会体系論』青木書店, 1974, p. 23.
- 13) 同上, p. 215.
- 14) 同上。
- 15) バーガー, P. L. & ルックマン, T., 山口訳『日常世界の構成』新曜社, 1977.
- 16) 同上, pp. 225-26.
- 17) 知覚における分節に関しては, ギョーム, P., 八木訳『ゲシュタルト心理学』岩波書店, 1952. 言語については, ド・リシュール, F., 小林訳『一般言語学講義』岩波書店, 1940. を参照。
- 18) 特に, フロイト, S., 小此木訳「快感原則の彼岸」『フロイト著作集6』人文書院, 1970, を見よ。
- 19) パーソンズ, 上掲書, pp. 214-16.
- 20) ヴィトゲンシュタイン, L., 藤本訳『哲学探究』大修館書店, 1976, pp. 36-37.
- 21) 以上は, バーガー & ルックマン, 上掲書, 「第II部 客観的現実としての社会」の本稿の趣旨に即した形での要約である。なお, 彼らは, 「外化」「客観化」をマルクス=エンゲルス, 「制度化」をヴェーバー, 「沈黙化」をシュッツにそれぞれ拠っている。
- 22) 同上, p. 116.
- 23) モース, M., 有地・山口訳『社会学と人類学II』弘文堂, 1976.
- 24) ゴッフマン, E., 丸木・本名訳『集まりの構造』誠信書房, 1980.
- 25) Goode, W., "A theory of role strain", *ASR*, vol. 25, 1960.
- 26) パーソンズ, 上掲書, p. 213.
- 27) バーガー & ルックマン, 上掲書, pp. 222-23.
- 28) このような議論において, 私はマイケル・ポランニーの『暗黙知の次元』(佐藤訳・紀伊国屋書店)を参考にしている。「暗黙知 (tacit knowledge)」とは, 近接項に注目するのに遠隔項によるために, 近接項が語ることのできない知識となっている状態のことである。
- 29) ヴィトゲンシュタイン, 前掲書, p. 18.
- 30) 同上, pp. 20-22.
- 31) 同上, p. 49.
- 32) パーソンズ, 上掲書。
- 33) ゴッフマン, E., 石黒訳『行為と演技』誠信書房, 1974, p. 298.
- 34) この語はシュッツ, A. によっている。『社会的現実の問題』マルジュ社。
- 35) ミード, G. H., 稲葉訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973.
- 36) バウアー, T., 鯨岡訳『ヒューマン・ディベロプメント』ミネルヴァ書房, 1982.
- 37) 内田伸子『ごっこからファンタジーへ』新曜社, 1986, pp. 240-67.
- 38) Giddens, A., *The Constitution of Society, Polity*, 1984.

(指導教官 天野郁夫教授)